

第二章 うろつきまわる権利

今から三〇年ほど前、カナダ、エドモントンのアルバータ大学で心理学を教えていたエド・コーネルは、九歳の少年の搜索を指揮している警官から電話を受けた。その子は、数日前に田舎のキャンプ場から行方不明になっていた。足跡からして、数キロ離れた沼地の方向へ歩いていったらしい。警官は彼に尋ねた——九歳の子ともはどのくらい遠くまで行きますかね？ コーネルと同僚のドナルド・ヘスは数年前からウエイファインディングに関する行動について研究していたため、専門家として白羽の矢が立ったわけだ。質問に答えようとして、ふたりは子どもが迷子になったときにとる行動について、ほとんど何も知らないことに気づいた。ふたりだけでなく、誰も知らなかった。迷子の子ともはどのように行動するのか？ どんなルートを取るのか？ どんな目印を使うのか？ どのくらい遠くまで行くのか？ ふたりは、関係のありそうな文献にさっと目を通し、分かるだけのことを答えた。「返ってきた言葉は屈辱的だった」と、彼らはのちに

書いている。「あまり役に立たないな。いいですよ、先生。今日はこっちで霊能者に頼んでみてもいいし」。

それからまもなく、コーネルとヘスは、その種のものとしては初めての実験を行った。大学近くの草原周辺に暮らしている三歳から二三歳までの一〇〇人の子どもとの親に連絡を取り、関係者全員の許可のもと、それぞれの子どもにこれまでひとりで行ったなかで家から一番遠いところまで自分たちを連れていってもらいたいと頼んだ。研究者たちは子どもの後ろを歩き、彼らの行動を観察し、道筋を図に記入し、距離を測った。なにもかも子どもたちが決めた。いつでも好きなときに休んだり、家まで戻ったり、親を呼び出すことができた。子どもたちがどのように進む方向や道を決めるのかという疑問に、科学的な目を向けたのはこれが初めてだった。研究の成果は、行方不明の子どもを発見するチャンスを増やしただけではなかった。子どもがどのようにして空間とかわり、世界について学ぶのかについて、それまでの理解を変えたのである。コーネルが発見したように、子どもたちは違ったやり方をするのだ。

* * *

エド・コーネルと連絡を取るのには時間がかかった。研究職から引退したあと、ワシントン州のカスケード山脈をかすめるコロンビア川上流の小さな町ホワイト・サーモンに引っ越していた

からだ。そこで彼は、地元の研究救難チームのボランティアとして働き、行方不明の人々を発見することに力を注いでいる。九月も末のある朝、私たちは町の大通りにあるカフェで会った。彼は私を連れて、周辺を案内してくれた。シダー、オーク、モミ、ツゲが混じりあう珍しい植生。牧場とブドウ園が幾重にも連なる。東に向かって、風景は温帯の森からサバンナへとしだいに開けていく。途中あちこちでコーネルは立ち止まり、現地の生態系の境目や、変わりやすい天気について語るのだった。彼はまた放牧地で道に迷い、あるいは険しい渓谷にはまり込んだ人々の救助を手伝った場所をいくつも指し示した。コーネルは何事にも熱中して取り組むタイプで、人間の行動ばかりでなく、周りの環境にも際立った観察眼を見せる。これは救難の場で役に立つのはもちろん、そもそもなぜ人が迷うのかを研究する学者としてもびっぴりの資質である。

うろつきまわる子どもたちについて調べたコーネルとヘスの研究からは、いくつかの驚くべき洞察がもたらされた。主なものとしては、子どもをひとりであつておくと、他の人々、特に親たちが考えるよりも、はるかに遠くまで移動するということだった。その距離は予想したよりも平均して二二パーセントも長く、なかには三倍あるいは四倍も遠くまで行くこともあった。だがとりわけコーネルの興味をひいたのは、子どもたちがどのように旅したかであった。今まで行ったなかで一番遠い所まで行くように言われた子どもたちは、誰ひとりそこまでまっすぐには行かなかった。彼らはふらふら歩き、いろいろなものに気を散らされ、長い回り道をとった。

「子どもが行くところはどこにでもついていたよ」とコーネルは思い出すように言う。「近道が

するのに、ショッピングモールを通り抜けもしたし、雪の積もった空き地も横切ったし、サッカーの試合をしているところを突っ切ることさえあった。もっとよく見ようとして消火栓によじ登り、木の葉の山を蹴とばし、石を投げ、立ち止まってパーベキューを眺める。生まれついた本能に従っているようだった。たくさんの子が、前に行った道から外れていると平気で認めたものだ。ある子どもは、歩き終えるまでに二時間以上かかったよ⁽³⁾。

自分の子ども時代を思い出してほしい。こんなふうにあてどもなく、心のままに、知らない世界へ入っていくことで、子どもは空間に対する理解を発達させ、またやり通した場合にはウェイファインダーとしての自信を手に入れる。これは生存戦略である。世界を知ることとは、その中で安心していられるということだ。私たちはみな、衝動に駆られた冒険家として人生を始める。コーネルは、自分が子どものときにもそんなふうだったことを覚えていて、探検したいという衝動は、人を人たらしめるもののひとつだと彼は言う。「未知なるものの中に入り込むこと、秘密のルートを見つけること、自分しか知らない場所を知ること、秘密の岩、洞穴への近道——子どもはそういういたものが大好きだ。それは子どもたちに、彼ら自身の認知について、記憶について、目印ランドマークの使い方について、そう、何もかも教えるんだ」。子どもたちは、大人には見えない場所を見るだけでなく、衝動的にそこに入り込もうとする。ロバート・マクファーレンは、その著書『ランドマーク』の子ども時代の地形についての章でこう述べている。小さな子どもにとつて「自然はドアでいっぱいだ……そして一歩進むたびにそのドアはぱっと開く」。彼はこう続ける。

る。

木の洞うらは城への入り口だ。乾いた土に開いたアリの巣穴は、世界の向こう側へと導く。木の枝の山は宮殿だ。水たまりは、海底の王国の玄関だ。三歳や四歳の子どもにとつて「風景」は背景でもないし、壁紙でもない。それはチャンスにあふれ、移ろいやすい質感を持った媒体なのだ……私たちが無味乾燥に「場所」と呼ぶものは、幼い子どもにとつては、夢と魔法、そして実体からなる野生の複合体なのである⁽³⁾。

コーネルとヘスがこの研究を始めていた頃、ニューヨーク市立大学の地理学者ロジャー・ハートはニュージーランドの小さな田舎町で子どもたちを対象にした二年にわたる研究の真っ最中だった。その町に住んでいた子どもは全部で八六人だった。彼は子どもたち全員を観察し、彼らと話をした。ハートの研究は地理学と心理学の両方にわたっていた。彼は子どもたちが近所の通り、庭、野原、小道とどうかかわったか、またそれらが彼らの考えや行動にどう影響したかに興味を持った。子どもたちはいろいろな場所に「いる」のを楽しむのとまったく同じように、そこに「たどり着く」のを楽しむ——これはハートがなした不朽の洞察のひとつだ。「多くの場合、彼らは『そこに行く』わけではない。彼らはただ探検している⁽⁴⁾」。新しく発見した道や近道は、子どもにとつてわくわくする宝物となる。だからわざわざいつも道を通して、新しい道を使う

のだ。自己啓発の指導者たちは、旅をすることは目的地に着くよりも重要だとよく言う。だが子どもは言われなくても分かっている。彼らにとって、旅はすべてなのだ。

* * *

読者のなかで、今述べたハートによる子ども時代の描写が心に響かない人がいたとしたら、ひよっとして一九七〇年代以降に生まれたのかもしれない。実はここ四、五〇年間で、子どもたちがうろつきまわる機会は大きく減っているのだ。統計を見てみよう。

- 子どもの「ホームレンジ」——子どもがひとりで家から出て遊ぶことを許されている距離——は、調査されたすべての国で過去二世代もしくは三世代で減少している。九〇パーセント以上減った例もあるくらいだ。⁽⁷⁾
- イギリスでは、学校以外の場所にひとりで行くのを許される小学生の割合は、一九七一年の九四パーセントから二〇一〇年には七パーセントに落ちた。⁽⁸⁾
- イギリスで、近所の公園や原っぱなどで外遊びをするのは、七歳から一一歳までの子どもの四分の一以下である。彼らの親の世代が同年齢だった頃には、四分の三の子どもが外で遊んでいた。今、その年齢の大部分の子どもは家で遊んでおり、七〇パーセント以上は、

とどこで遊んでいても常に監視されている。⁽⁹⁾

二〇一五年に、イギリスのシェフィールド大学の研究者たちは、シェフィールドの町で暮らす家族を対象に親子三世代にわたりインタビューし、子どもの頃というふうに歩きまわっていたのかを調べた。学者たちの言う「子ども時代の空間次元」を探ったのである。典型的なケースを紹介しよう。家族のなかで、一九六〇年代に育った祖母は、友だちと会うために四、五キロ離れた地元のユースクラブまでひとりでよく歩いて行った。一九八〇年代に子ども時代を過ごした彼女の娘は、家から五〇〇メートルほど離れた店に行くのを許された。そして今、一〇歳の男孫がひとりで行ける一番遠い場所は、道路を一〇〇メートル行った先の友だちの家だ。この家族のホームレンジはほんの三世代で数十分の一に縮んでいる。⁽⁸⁾これはかなり劇的な変化だが、たいして珍しいケースではない。今日の子どもたちは、祖父母と比べて、探索することも、戸外を経験することも少なくなっており、遊ぶ仲間の子たちも少なく、だいたいいつも親の目がある。彼らの空間生活は管理されており、ほぼ自分の家だけに集中している。

この変化はどうして起こったのか？ そこにはふたつの要素が特に関係しているようだ。第一の要素はもちろん交通の問題である。道路には途方もない数の車が行き来し、そこを途方もない数の不注意なドライバーが猛スピードで走り抜ける。一九五〇年以来、イギリスの交通量は、一〇倍に増えた。⁽⁹⁾袋小路にでも暮らしていないかぎり、家の外で遊ぶことはもはや考えられず、親

は道路を横切らないと行けない場所には子どもを出したからない。車に轢かれて死んだ子どもの数は、交通量の増加にもかかわらず実際には減っているが、その理由は道路がそこそこ安全になったからではない——道路にはもう子どもがいなのだ。

子どもが自由に歩きまわるには、道路の安全は現実問題として不可欠である。その一方で子どもがホームレンジが小さくなったもうひとつの理由は、ほぼ完全に親の想像によるものだ。「知らない人は怖い」と彼らは考える。通日も公園も遊び場も、小さい子どもを誘拐しようとしている人々がいつぱい、というわけだ。こうして多くの親は、子どもが安全なのは家にいるときだけだと信じ込む。最近、親と子の関係について国際的な調査が行われたが、質問に答えた人々のおよそ半分が、最大の心配ごとは、子どもに対する犯罪だと述べた（高いところではスペインの六〇パーセントから、低いところではスウェーデン、中国、オランダの三〇パーセント前後まで）。こうした不安を煽っているのは、わずかな件数の子どもの誘拐、性的いたずら、もしくは殺人事件についてのセンセーショナルな報道である。

こうした事件に向けるメディアの強迫的なまでの執念は、現実の脅威を誇張してきた。二〇一六年にイギリスで殺された一六歳以下の子どもは四人である。過去二〇年間、毎年九人を超えたことはない。年によってはひとりもないか、ひとりだけの年もある⁽¹⁾。知らない人々への恐怖を誇張することなく正しく捉えるのは、子どもの自由への影響を考えれば、きわめて重要である。実はここに厳しい事実がある。実は、子どもは知らない人よりも、知っている人々、なかでも親

や継父母によって殺されたり、危害を与えられるケースの方がはるかに多いのだ。ニューハンプシャー大学で「児童に対する犯罪研究センター」の所長を務めているデイビッド・フィンケラーによれば、アメリカ全土で知らない人に誘拐される子どもの数は行方不明の子どものうちで〇・〇一パーセントであり、暴行や拉致など子どもへの重大な犯罪の全体数は、一九九〇年代初頭から大きく低下してきている⁽²⁾。これらのデータが示すのは——交通の問題は別として——子どもたちが近所の道路や街はずれをうろついても、両親や祖父父母のとき以上に危険なことはないということだ。

こうした現実があるにもかかわらず、アメリカでは地域によっては子どもを監視なしで歩きまわらせるのは社会的に受け入れがなくなっているようだ。警察は、子どもをひとりで学校まで歩かせ、公園で遊ばせ、あるいは車にひとりで残した親に対して、「未成年者を危険にさらす行為」の罪で逮捕、訴追している。こうした常識を破って、ユタ州では、二〇一八年に「放任主義育児（フリーレンジング・ペアレんティンク）」を選ぶ人々を保護する法律を通過させた。子どもが自立するためには、ひとりで行動させることが必要だという考えからだ。これは良いニュースだが、それにしても子どもがいつもやっていたこと——探検の自由——を保障するのに法律が必要というのは、信じがたい気がする。

一方、現代の子どもが束縛されている背景には、車の多い道路や犯罪に対する誇張された恐怖ではなく、デジタル・テクノロジーやソーシャル・メディアがあると考える人々もいる。タブレ

ットで遊んだり、チャットアプリで友達とおしゃべりしたり、SNSで自撮りの写真を交換したりできるというのに、なんで外に行きたがるのか。要するに子どもは、祖父母が通りや公園でやっていたこと——つまり親の目や耳が届かないところで、友達とつるんで遊ぶこと——をオンラインでやっているにすぎないというのだ。だがデジタル空間でそうしているのは、必ずしも子どもたちがやりたくてやっていることではない。二〇〇九年に世界二五カ国で七歳から一二歳の三〇〇〇人の子どもたちを対象にした調査が行われた。それによると、ほとんど全員がいちばん遊びたい場所は外だと答えた。また九〇パーセント近くが、ネットより友達と遊ぶほうがいいと言った。⁽¹⁾だがたいてい、彼らにその選択肢はない。私たちは、子どもがじかに一緒に集まるのを難しくしてしまった。彼らが二番目に好きなことを喜んで受け入れたのも別に驚くことではない。

外の世界とのかかわりの欠乏は、ほぼ確実に子どもから貴重な経験を奪う。ある程度まではフリーオンラインゲームで、友達とつきあい、探検し、うろつくことができるかもしれない。だが私たち人間は、これだけ高度に知的で複雑な存在になっけていても、いまだに空間の生き物であり、動きまわるように進化してきた歴史がある。私たちにとって物理的世界と交流することではか——世界の次元を試し、その扉を叩くことによつてしか——学ぶことができないものがあるのだ。好奇心がもつとも強く、もつとも制約のない子ども時代になれができれば、二度とそのチャンスを手に入れることはないだろう。